



浜松科学館で活躍中! 運用のメリットと安全性をバランス設計した「案内」ロボット ALSOK『An9-PR』

浜松科学館で活躍する案内ロボット「ブルー夢」

弾力のあるスポンジと硬質ウレタン樹脂に覆われた丸いドラム缶のようなボディ。

横から見ると口の大きなペンギンのようにも見えるボディには、三面のディスプレイやカメラが内蔵されている。ゆっくりと移動しながら、何やら喋っている。

「あーあびっくりした」、「どうして分かってくれないのかなあ、どうしてこうなっちゃうのかなあ。わかってほしいよなあ。この気持ち」、「つらいのは一緒なんだから」、「僕の体重は200kg。相撲取りになるのが夢なんだ」などなどとおしゃべり、不思議キャラの案内ロボットが浜松科学館で稼働中だ。

浜松科学館には、NECが構築した展示システム「HAMES IV」が導入されており、案内ロボットとしてALSOKの屋内向け案内ロボット「An9-PR（アンナイン・ピーアール）」が導入されている。愛称は「ブルー夢（ブルーム）」だ。



取材当日は、大雨だったにも関わらず、幼稚園児達で賑わっていた浜松科学館。



ブルー夢は、泣き顔や笑い顔など多彩な顔に変化させ、終始ぼやきながら、展示階を紹介してまわる。

複数表示モニタを備えたブルー夢の特徴

「An9-PR」は、商業施設などの人が多く集まる屋内施設向けに開発されたロボットで、2009年7月に発表された。高さ1,570mm、幅900mm、奥行き1,000mm。重量は約200kg。走行速度は最大約4km/h。連続1時間の走行が可能。もちろん自動で充電ステーションに戻って充電する機能もある。

特徴は二つ。一つ目はデジタルサイネージ（電子看板）機能を搭載していること。本体上部には一周ぐりと360度電光掲示板を備えている。

サイドの表示モニタと電光掲示板を効果的に使って、展示内容を表示できる。



胴体中央部には表示モニタを3画面。正面の19インチのモニタはタッチパネルになっている。音声も使って、導入施設のフロア案内などを行える。

ロボットの手元には非接触カードリーダーを搭載している。カードリーダーそのものも派手に発光する。

二つ目の特徴は、その大きさだ。重量200kgのスペックからも想像できるだろうが、かなり大きいのだ。これは、できるだけ多くの人々にサービスを提供するため目立つ大きさを目指した結果だという。

「営業からはもっと大きくしてくれという依頼がありました」とALSOK開発技術部機器開発室グループサブマネージャーの菅原雄介氏も語る。だが大きなロボットは扱うのも難しい。広告効果と制御のしやすさ、両者のバランスを考えた結果が、この大きさだったようだ。

なお200kgの巨体だが、大人からすれば圧迫感は意外とない。ただ、中には怖がる子どももいるようだ。

また同社がこれまでの警備ロボット開発で培った自動走行、センサ、顔検出機能などの技術も応用されており、ちょっとしたゲームを行うことも可能だ。「ブルー夢」では、顔を検出して、画面上で装飾して、ロボットのカメラで撮影。そのデータを館内で有償配布されているカードのシリアルナンバーを使ってダウンロードできたりするようになっている。また、距離センサを使うことで人間の足を検知し、モニタ上の物体を消すゲームなどが行えるようになっていた。そのほか、納入先に応じたコンテンツを製作して搭載できるという。



充電中のブルー夢の左手に「ブルー夢カード」をかざすと、各種ゲームに挑戦することができる。このカードがあれば、浜松科学館HP上にマイページを持つことができる。



館内を訪れたお客さんが、「おもしろロボ写真館」の機能で写真を撮ってもらっているところ。

ロボット最上部には、カメラを2台搭載している。一つ目は周囲の画像を撮影するカメラ。このカメラからの画像はウェブ上でも公開されており、アクセスすることでロボット視点での浜松科学館の中の様子を見



ロボット上部にある、パンチルトカメラ。